

クレチン症のマス・スクリーニング

熊大小児科 松 田 一 郎
 化血研 橋 本 茂 紘
 林 田 寿 幸
 梅 橋 豊 蔵

〈はじめに〉 私達は固相法 TSH・RIA にてクレチン症のスクリーニングを行ってきたが今般これを基として大分、佐賀、沖縄県を除く九州全域を対象地区としてスクリーニングを開始した。固相法 TSH・RIA の基礎的検討の成績とあわせてこれまでのスクリーニングの状況を報告する。

〈基礎的検討〉 今回私達を用いた固相法 TSH・RIA は従来の Sephadex-anti TSH Complex 溶液作製時の洗滌操作が省略され、Tween 20 液そのもので溶解したものを使用する。従って多検体処理の場合はかなりの時間的余裕がとれるようになった。濾紙血溶出時間、操作の検討では4時間かつ水平振盪時間2時間で低濃度での TSHスタンダードカーブの立ちあがり著明であった。洗滌回数は3回、4回とも変化なく3回で充分である。濾紙血の直径差での検討では3mm×2枚と4mm×1枚では差違はみられなかった。ヘパリン加濾紙血と EDTA-2 Na 加濾紙血との比較では両者間には問題は認められず、ヘパリン加濾紙血でもよいことがわかった。以上の成績より再現性を検討したが満足すべき値をえた。

次にマス・スクリーニングの成績では昭和55年2月28日現在までに45,081人の新生児についてスクリーニングを行い5名陽性者を発見した。これは新生児8,400人に1人の割合の発見である。私達が follow している1名は臨床症状は生後13日にて、ほとんど認められないが大腿骨々核は全く形成されていなかった。また血中 T_3 は 170 ng/dl と正常であるが T_4 は

1.8 $\mu\text{g}/\text{dl}$ 、TSHは200 $\mu\text{U}/\text{ml}$ と異常値を示していた。現在L- T_4 を投与している。

クレチン症マススクリーニング実施状況(55年2月27日現在)

	検査数	再採血数	陽性数
1979 前	3,078		0
10	5,744	14	1
11	5,347	9	1
12	6,800	5	0
1980			
1	11,757	5	1
2	12,355		2
Total	45,081		5 (1/9016)

厚生省先天性甲状腺機能低下症の 早期発見に関する研究

久留米大学医学部小児科 山下文雄
林真夫

I クレチン症マス・スクリーニングの現状

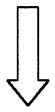
1975年11月から1979年9月まで総数23,008名のスクリーニングを施行し、高TSH血症(SITSH)、一過性甲状腺機能低下を含め5名の患児を発見した。再検査数は730名(3.2%)、呼び出し数は24名(0.1%)であった。(Table 1)

II 一過性高TSH血症の1例

スクリーニングにより発見された症例で、入院時の甲状腺機能はTSH 71 $\mu\text{U}/\text{ml}$ 、 T_4 (RIA) 10.3 $\mu\text{g}/\text{dl}$ 、 T_3 (RIA) 275 ng/dl 、 RT_3U 25.5%であった。LH-RH test、TRH test は過剰反応を呈した。生後103日~111日には血中 T_3 、 T_4 の正常化が認められた。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



はじめに 私達は固相法 TSH・BIA にてクレチン症のスクリーニングを行ってきたが今般これを基として大分、佐賀、沖縄県を除く九州全域を対象地区としてスクリーニングを開始した。固相法 TSH・RIA の基礎的検討の成績とあわせてこれまでのスクリーニングの状況を報告する。